

発行：弘大病院広報委員会
(委員長：鈴木唯司病院長)

〒036-8563 弘前市本町53
弘前大学医学部附属病院
TEL0172-33-5111 (代表) FAX0172-39-5189

弘大病院広報

南塘だより

第29号

(創刊：1994年12月15日)

※南塘とは、弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言

弘前大学医学部附属病院長
鈴木 唯司



14年度の補正予算で、外来棟の新築を目標にして、新外来棟の新築予定地にあたる古い建物の取り壊し予算が認められました。

これまで患者様に不自由をおかけしてきた外来棟の新築が軌道に乗ると期待がふくらみます。現在の外来棟は昭和46年に建てられ、その後診療科や診療部の増加に伴って改築

を重ねてきました。しかし、いかにせん建物自体が古く、狭い事もあり患者様のプライバシーも十分保たれないようになっていたらくです。

新しい外来棟では、総合診療部が救急患者も含めて最初に患者様を迎える事が出来るようになります。高度な専門治療の一方で、まず患者様の御希望に沿った治療をここから開始する体制が出来ることとなります。又、診療科も大きく、内科系、外科系フロア等に統一し、そのフロアで消化器内科、循環器内科あるいは消化器外科、心臓血管外科と言った臓器別の診療科に専門医を置き、患者様にわかり易い診療体制のもと、各科の連携も密にしたいと考えています。救急部も充実し救急救命センターへの発展も期待されます。外来棟の建築を期に患者様に一層優しい病院にしたいものです。

診療科の紹介

【第一外科】



弘前大学医学部附属病院第一外科の担当分野は、心臓血管外科、呼吸器外科、食道外科、乳腺内分泌外科と多岐にわたり、病院内の内科系診療科のみならず地域の医療機関との密な連携のもとで治療にあたっています。この1年間での手術症例数の増加は著しく、昨年1年間の手術件数は453件と、前の年に比べて+77件(+20%)の著しい増加を見えています。

心臓手術では虚血性心疾患の外科治療に積極的に取り組んでいます。疾患の性格上、循環動態が不安定な重症例を多く手がけていますが、体外循環を使用しない心拍動下冠動脈バイパス術を取り入れ、治療成績は良好です。救急部で重症な症例を受け入れ、第二内科で診断し、第一外科で手術を行なうという緊密な連携体制ができあがっています。また、先天性心疾患に対する外科治療例も増加しており、未熟児の

動脈幹開閉に対する手術、新生児の重症心奇形に対する手術、複雑心奇形に対する根治術などに小児科心臓グループと協力して治療にあたっています。また、末梢血管外科では、放射線科と協力して低侵襲の血管内手術に取り組んでいます。

呼吸器外科グループでは胸腔鏡を用いた低侵襲手術に取り組み、良好な成績を収めています。術後の創部の痛みが軽減され、傷も小さいため患者さんの回復は早く、術後の在院日数も短縮されました。

乳腺甲状腺外科では、第二外科と共同で診療にあたっており、相互の治療の良い点を取り入れ、乳房温存手術など患者さんの満足度の高い治療が提供できるように努力しています。

津軽地域の基幹病院としての要請が高いため、重症例を多数扱っていますが、スタッフの数が少なく、医師および看護師は極めて忙しい毎日を過ごしています。国立大学附属病院でこれだけ多数の手術を手がけている施設は少なく、ますますの業務の効率化とスタッフの充実に取り組んでいきたいと思っています。

厳しい仕事ですが、元気になった患者さん達の笑顔が心の支えにして、スタッフ一同、頑張っています。

福田 幾夫

クリティカルパス講演会報告

平成15年1月24日、国立長野病院の武藤正樹副院長においでいただき、クリティカルパス講演会を開催しました。当日は医師、看護師および事務関係職員など130名以上の参加を頂き、活発な討論が行われました。はじめに、昨年8月に行われた当院でのクリティカルパス実施状況のアンケート調査の結果が報告され、当院ではまだパスの活用が不十分であることや、医師と看護師との間にパスに対する認識の差があることが示されました。

武藤先生からは、クリティカルパスの日本の現状、医療制度改革の展望、国立病院の独立行政法人化後の経営対策ツールとしてのパスの活用など包括的なお話を頂きました。また、クリティカルパス作成の10ポイントとして、1) 根拠に基づいてパスが作られていること、2) 診療ガイドラインとともにパスが使用されていること、3) 情報開示、4) アウトカムの設定、5) バリエーションの収集と分析、6) 臨床インデキターとの併用、7) 医療安全への活用、8) 医療連携、9) DRGへの対応、10) 電子カルテへの対応などが示されました。これらの点は、今後当院で、よりよいパスを作成していくうえで大変参考になりました。

引き続き、第二内科、第二外科、第三内科からクリティカルパスの活用状況について報告があり、熱心な討論が行われました。このなかで、クリティカルパス作成と活用の段階で、医療連携が高まることや、患者さんへの情報開示へ役立てる方向性が示されました。また、第二外科からは難しい外科治療でも、パスの導入により治療の質を向上させながら在院日数の短縮を実現したことなど、大変勇気づけられる報告もいただきました。

平成15年度より、特定機能病院では疾病別日額制が導入されることになっており、在院日数の短縮や医療の効率化が求められます。さらからは、大学病院が経済的で質のよい医療を、効率的に供給する先頭に立つこととなります。今までと頭を切り替えて、医療経済も考慮に入れた治療を提供していくため、当院でもクリティカルパスの広範な応用を行なっていく必要があると思います。

福田 幾夫

先憂後楽

附属病院の小児病棟を考える

小児外科 棟方 博文



看護部では、「大学病院内に小児病院を！」という構想があったと記憶している。それは附属病院に小児部門の建物を新たに増設することではない。各病棟に散在する患児を年齢層層別に収容し、それぞれの年齢層に適した環境下で小児医療を行うものである。私どもの小児外科は外科病棟に組み込まれている。しかし、全国大学病院の小児外科病床の現状を学会で調査した結果、小児外科を標榜し小児外科病棟を有する施設が9施設、小児科と共有が19施設、小児病棟として小児科以外の他科との共有が9施設であり、外科病棟に有するのが僅か5施設であった。一方、外科の1グループとして小児外科診療を行っている17施設のうち、外科病棟を使っているのは以外にも1施設のみで、ほとんどが小児科病棟を使用していた。すなわち、弘前大学小児科のような病床の配置形態は全国的にも極めて少ないことになる。

さて、本院の小児病棟を考える上で問題となるのは、広大な面積と高度な医療機器の完備されたGCUの有効利用であろう。広範な地域医療を担っている医学部が、青森県の新生児医療の改善に向けて積極的に取り組んでいく姿勢を内外に示すためにも、周産母子センターの運用改革が必要と考えている。周知のように新生児は主に小児科病棟で診療されているが、将来的には小児科病棟の新生児とコトで管理されている乳児をGCUに収容し、NICUとGCUを小児科で管理できるようになればと期待している。それによって現在GCUで行われている分娩に関わる業務を全て2病棟3階に一元化でき、看護部としても適正な人材をGCUに配置できます。しかし、これには小児科に過大な負担を強いる問題点があり、これまでは話題にすることすらできませんでした。小児科と産科婦人科に新しく柔軟な指導者が誕生した今こそ、将来に向けて率直に話し合う環境が出来あがったと考えている。皆様のご理解とご支援をお願いしたい。

患者サービスのためのクリスマスコンサート

12月20日(金)午後6時45分から「クリスマスコンサート」と題して、本年度第1回目のコンサートを開催した。

当日は、「医学部創立50周年記念アンサンブル」と「医学部管弦楽団」のメンバーが多数、出演協力されました。

コンサートホールとして使用した会場は普段外来患者さんの待合室として使用しており、狭い会場ではあったが、車椅子や点滴スタンドの患者さん等がホール狭しと集まり、約200名の聴衆がありました。

所用で出席できなかった病院長に代わって鈴木副病院長からの、管弦楽団

の紹介を兼ねたあいさつした後、プログラムに添って、指揮者である馬場助教(脳研)の分かりやすい演奏曲の説明で、C. P. E. バッハ：行進曲二長調、クリスマスソングメドレー等数曲の演奏があり、患者さんにとって普段あまり聞く機会が少ない、生での名曲演奏が次々演奏され、時を忘れさせあつという間にであったが、クラシック音楽に耳を傾け聞き入っていました。

華麗な旋律、音色の中演奏者には顔見知り

の先生方もおり、和やかなクリスマスコンサートでした。

院内コンサートは、患者サービスの一環として、今後もボランティア等の協力を得ながら開催を予定しています。



平成14年度弘前大学医学部附属病院診療奨励賞授賞式が行われる

第5回附属病院診療奨励賞授賞式が、2月14日メディカルコミュニケーションセンターにおいて執り行われ、受賞者に鈴木病院長から本賞の楯と副賞として財団法人弘仁会から奨学寄付金が贈呈された。今年度は、診療技術賞として治療側から患者中心に発想を転換した横断的チーム医療を可能とする治療体制を構築した小児悪性固形腫瘍治療チーム(代表 照井君典)の「小児悪性固形腫瘍の集学的治療体制の構築」と、患者中心に考えた在宅化学療法に

て医師・看護師・患者のコミュニケーションを図り患者のQOL向上に寄与する治療体制を構築した第二外科(代表 村田暁彦)の「当科における術後在宅化学療法の意義-末期癌患者のQOL向上を目指して-」の二主題が受賞した。授賞式に引き続き、祝賀会が同センター内にて和やかに行われた。なお、今年度は心のふれあい賞に応募がなく、次回同賞への応募が期待されるとの病院長及び阿部選考委員長長の発言があった。

小児悪性固形腫瘍の集学的治療体制の構築

- 小児科 照井 君典, 高橋 良博, 佐々木 伸也, 工藤 耕
- 小児外科 須貝 道博
- 放射線科 青木 昌彦, 三浦 弘行
- 脳神経外科 大熊 洋揮
- 第一外科 對馬 敬夫
- 耳鼻咽喉科 一戸 学
- 眼科 間宮 和久
- 麻酔科 村岡 正敏



当科における術後在宅化学療法の意義-末期癌患者のQOL向上を目指して-

- 第二外科 村田 暁彦, 小山 基, 渡邊 伸和, 西澤 雄介, 中澤 秀明, 中井 款
- 看護部 久保田 昭子, 福士 明美, 田中 くに子

今回の診療技術賞をいただいた事は、研究部門のみが重視される大学病院にあって、臨床で働く医師として、誠に誇らしく思える受賞であった。実際の業務を殆どボランティアの状態で行っている我々にとって、かなり明るい材料である。題材は【当科における術後在宅化学療法の意義? 末期癌患者のQOL向上を目指して?】という、当科の外来において術後再発患者、末期癌患者に対して、約5年前より行っている在宅化学療法をテーマにした。実際の加療では、MRIポートを挿入留置し静注ルートとしている。手技的には、挿入経験を要するが、長期にわたり使用可能であり、治療時以外は、日常での不都合は生じない。実際の外来で、診療時間制限のなかでは、患者個人にかかる事の出来るコミュニケーションにも限界がある。そのため医師と看護師の連携が必要である。その中でお互いの信頼関係が生まれ、最終的には患者にメリットをもたらす。この治療形態は、癌が根絶されないかぎり、今後も外来治療で発展し、必要とされるものと思われる。大学病院のシステムのなかでは、実際連携の薄い職場という現実はあるが、患者さんへのメリットも忘れてはいけない。そのため、今後とも大学病院というバリアを取り去り、人間関係を充実させ、チーム医療を発展させて、患者中心の医療を心掛けたいと思う。

この度は、診療技術賞を頂きまして、誠にありがとうございます。

小児の悪性固形腫瘍の多くは、化学療法、放射線療法に感受性があり、集学的治療が非常に有効です。最近では、難治例に対して造血幹細胞移植を併用した超大量化学療法が導入され、難治例の予後も改善しています。現在、小児科、小児外科、放射線科を中心とした集学的治療により、小児がんの約70%が治癒するといわれています。

また、胚細胞性腫瘍や横紋筋肉腫などの腫瘍は、頭蓋内、眼窩、副鼻腔、胸腔内、腹腔内、四肢など、全身のあらゆる部位から発生します。そのため、診断、治療に際し、小児科、小児外科、放射線治療医のみならず、脳外科、眼科、耳鼻科、胸部外科など様々な科との連携が重要になります。さらに、画像診断、病理診断、手術に際して、放射線診断医、病理部、麻酔科との協力が必要です。

当院でも、以前は各科で独自に小児悪性固形腫瘍の治療が行われていましたが、現在ではほとんどの患児が、小児がん専門医を中心としたチームによるエビデンスに基づいた集学的治療を受けています。その結果、青森県の小児悪性固形腫瘍の治療成績が向上し、今までは助からなかった進行期の患児や、再発後の患児が、元気に退院できるようになってきました。

来年からは、施設ごとの骨髄移植の成績が骨髄バンクのホームページに公開される予定です。患児の家族が疾患、治療法、治療成績について詳細な情報を持っていることも多く、ますます高いレベルの医療が求められています。今後とも各科協力して小児悪性固形腫瘍の診療を行っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

病院レクリエーション(安比高原スキー場)

平成15年1月25日(土)に岩手県安代町にある安比高原スキー場へのスキー遊覧が行われ、医学部・附属病院の職員及びその家族約40名が参加しました。

当日は時々雪が降り、吹雪くこともありましたが、「スキーの日」で通常よりも割安で滑ることができるためか、ゲレンデはたくさんの人で賑わい、参加者も広いゲレンデで思い切り楽しんだり、温泉に入って日頃の疲れを癒してくつろいだりしていました。


また、往復のバスの中でも楽しく話をしたりと、和やかな雰囲気、職員及び家族の親睦も深まり、とても充実した一日を過ごしました。

スキー遊覧等、職員の親睦やフレッシュを目的に、次回も皆さんの楽しい思い出になるようなレクリエーションを実施したいと考えておりますので、皆さんのご意見・ご希望をお寄せください。



病院ホームページの開設について

病院ホームページを開設しました。 <http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/>


弘前大学医学部附属病院
HIROSAKI UNIVERSITY SCHOOL OF MEDICINE & HOSPITAL

〒036-8563 青森県弘前市本町53番地 TEL 0172-33-5111 (代表) 2003/03/04

Information

- 平成15年度卒後臨床研修プログラム・募集要項
- ① 弘大病院の歴史と現状
- ② 継続看護・医療相談コーナー
- ③ 診療料金について
- ④ 弘大病院の認定・承認について
- ⑤ 高度先進医療について
- ⑥ 卒後臨床研修センター
- ⑦ 治験管理センター
- ⑧ 弘大病院からのお知らせと広報
- お知らせ
- 弘大病院報誌「南塘だより」
- 病院内専用ページ

What's NEW

- インターネットエクスプローラ(IE)推奨
- ブラウザの文字サイズを「小」以下にしてご覧ください
- A4サイズのプリントには上下左右の余白を10mm以下にしてください
- 診察科のご紹介
- はじめて受診される方へ(受診はわかり)
- はじめにお読みください
- 弘大病院の特徴
- 受診される前のおねがい
- 弘大病院の位置と交通手段
- 外来診療についてのご説明
- 診療日と受付時間
- 各診療科の診察日
- 初めて診察を受けるには(初診手続き)
- 再診の手続き
- 診断書・証明書などの書類
- 入院診療についてのご説明
- 入院の準備と手続き
- 入院中の過ごし方(入院から退院まで)
- お見舞い・面会について
- 各種の募集

弘前大学 医学部 附属

●診療に関するお問い合わせに電子メールや電話でお応えすることはできません。あらかじめご了承ください。医療相談室にお問い合わせを行うか、受診手続きをおとりください。

●この公式ホームページは弘前大学医学部附属病院広報委員会により作成され運用されています。

患者サービスのためのレインボーコンサート

2月27日(木)午後6時45分から、本年度第2回目の院内コンサートを「レインボーコンサート」と題して、「弘前大学吹奏楽団」の演奏により開催した。

会場は、普段は外来患者さんの待合室として使用しているホールを使い、狭い会場ではあったが、多くの患者さん等がホール狭しと集まり、200名近い聴衆がありました。

鈴木病院長からのあいさつ、吹奏楽団の紹介の後、プログラムに添って「日本の情景『春』」、「大きな古時計」、「イン・ザ・ムード」、「川の流れるように」、「となりのトトロ」など、みなさ

んが馴染みのあるような曲目が演奏され、また曲と曲の間には吹奏楽団による説明などもあり、患者さん等も興味をもって音楽に耳を傾け聞き入っていました。

吹奏楽団により用意された、歌詞カードや手作りの楽器を患者さん等に配布することで、演奏者と観客が一体となり、一緒に歌ったり楽器をならしたり、最後にはアンコールがおこるなど、賑やかなコンサートでした。

今後も院内コンサートは、患者サービスの一環としてボランティア等の協力を得ながら開催を予定していきたいと思います。



【編集後記】

平成15年度を目前に控え、年度末の忙しい業務に追われるなか、人事異動による「送別会」も催されるため、スケジュール調整ができなくなる人もいるのではないのでしょうか。健康にはくれぐれも気をつけてください。

さて、平成14年度を振り返って見ますと、我が医学部及び附属病院では色々な出来事がありました。なかでも「医局廃止」に対する各方面からのいい意味での反響には驚いて

おり、新聞だけでなく、テレビや雑誌社からの取材や問い合わせで振り回されています。一番の課題は、「医局を廃止して後、どのように変わるのか」とか「地域医療機関からの医師の派遣要請はどのように変わるのか」との質問への対応です。色々な言葉を並べてもなかなか明快な答えにならず、今後の大学病院の動向をみてもらうしか、そのすべがないことです。我々、公務員としての節度ある行動のみが頼りです。よろしくお祈りします。

(事務部 J・M)